

部会だより

バイオテクノロジー部会

「バイテク部会関連シンポジウムを覗いてみませんか？」

バイオ関連合同シンポジウム

設立10年目の節目を迎えたバイオテクノロジー部会は、2006年秋に兄弟部会ともいえる生体機能関連化学部会および生命化学研究会とともに日本化学会バイオ関連合同シンポジウムを開催した。会場となった京都大学桂キャンパスには、バイオ関連の化学と工学に興味をもつ研究者・学生が500名以上参加し、熱のこもった発表や議論を繰り広げた。本部会は、かつては生物学の研究対象であった遺伝子やタンパク質・酵素、細胞などがバイオ分子/システムという視点において化学の領域において取り扱うべきものであるという世界的な認識に呼応するかたちで発足した経緯をもつが、今回の合同シンポジウムの盛況は、そのような流れが部会や研究会の垣根を越えて定着し大きなうねりとなりつつあることを実感させるものであった。今後、化学会において設置されたディビジョン制の枠組みを有効に活用することによって部会・研究会間の交流が益々盛んになれば、部会員だけでなく化学会員の皆さんにとっても刺激になる企画が送り出せるようになるであろう。

バイオATPシンポジウムin日本化学会

実はそのような試みの第一弾が、2007年の化学会春季年会（関西大学）で始まる。バイオ領域の産学交流や連携を模索・促進するための場を提供するために、バイオ化学/工学領域を中心としたアドバンステクノロジープログラム（ATP）がそれである。これまで材料化学を中心テーマにして進められて来たATPにバイオ領域が新たに参加して、「未来社会を支える化学技術としてのバイオケミカルテクノロジー」を討論主題とした2日間のプログラムを用意した。グリーンバイオとフロンティアバイオの二つのセッションにおいて学会からの研究発表とほぼ同数の産業界からの講演が設けられた。これらを聞き討論に参加することによって、日本の化学会におけるバイオ技術・産業展開の現状と将来を展望できる企画である。本部会が取り扱うバイオサイエンス/テクノロジーは基礎的な研究と応用技術との距離が比較的近いという特徴を持っている。参加は部会員や化学会員に限定されないオープンなものなので、基礎研究の社会貢献に興味をもつ研究者やバイオ領域への展開を模索されている企業研究者の積極的なご参加をお願いしたい。

バイオテクノロジー部会/ライフサーベイヤ国際シンポジウム

国内における部会間交流や産学間の連携促進とともに、欧米やアジア諸国とのバイオテクノロジー領域における国際交流も、本部会が担うべき重要な役割である。昨年度本部会の研究者を中心に立ち上がった特定領域研究「生体分子群のデジタル精密計測に基づいた細胞機能解析：ライフサーベイヤをめざし

て」(代表：神原秀記日立製作所フェロー)と連動する形で、2007年9月5日から8日に部会シンポジウムと国際シンポジウム(早稲田大学)を準備している。ここでは、生体内の種々の分子情報を定量的に検出し解析できる日本発のオリジナルな化学・技術の開発を目指した多方面からのアプローチが最新の成果とともに議論される予定である。これらは10年後の化学とバイオの境界領域の潮流となるであろうIn Cell(Vivo) Chemistry, Chemical Biology, Systems Biologyの発展に取って不可欠な基盤技術として期待されている。また外国のバイテク企業の参加も予定されており、産学連携の好例を参考にすることも出来るであろう。

皆さんも化学会バイオ部門が用意する面白いシンポジウムに参加してみませんか？

バイオテクノロジー部会副部長 浜地 格 (京都大学教授)